

「青竹打ち」はとても重労働で、昔行っていた所も今や全てオートメーション化された中、佐野は昔ながらの伝統の手打ち法をかたくなに守っている。また、「佐野の水を使って、この地で作ったラーメンをこの地で食べる」のが佐野ら一めんであり、日本4大ラーメンの札幌や喜多方などのように、全国にチェーン化しないことも特徴と言えよう。一見、外に出ようとしなない頑固もののように感じられるが、裏を返せば頑固だからこそ昔ながらの青竹打ちが残っているのではなかろうか。さらに佐野ラーメンのスープ・具を見ても、いたってシンプルであるが、シンプルだからこそ誤魔化せられない。シンプルさの中に本物の味が光っているのである。

私が1997年8月に行った「岡崎麺」のもとでの2週間に及ぶラーメン修行体験では、青竹打ちや接客のみならず、もっと深いものを学んだ気がする。ラーメン職人の生活ぶりを見ながら、古き良きものを守る大切さと難しさ、人にとって生きる価値となるもの、家族の絆、夫婦のあるべき姿である。店主の岡崎さんは「他人より何倍も手間ヒマかける。そうすることで何かが生まれる」と、毎日とても多忙なスケジュールの中で、お客さまへ出すラーメンへの愛情とこだわりを貫いている。そうすることでお客さんに作り手の心が伝わり、ラーメンを通して人が繋がっている。また岡崎さん自身も自分の納得のゆく人生を送ってられるのだ。

まさに佐野ら一めんは、作り手・受け手双方の「ひとをつくり」、佐野という「まちを彩り」、人と地域、双方の「歴史を刻み」、そして近い将来、ラーメンを通して人と人との心の繋がりが、「世界を結ぶ」であろう。

“食の力”－“佐野ら一めんの力”に私は敬服するばかりである！

## 公園の利用状況にみる地域間の差異

上野悦子

我々が何気なく目にし、利用している公園

は、都市を形成する上で重要な役割を果たしてきた。本研究ではそこに着目し、公園、特に公園の利用状況を通して、大都市と地方の小都市との地域間に生じる差異を見いだすことを目的とした。

そこで、地方の小都市として栃木県真岡市を、大都市として東京都杉並区を選定し、真岡市では古聖公園、駒塚公園、泉公園の3カ所、杉並区では今川一丁目公園、今川二丁目公園、桃井公園の3カ所、合計6カ所を調査対象公園とした。調査方法は来園者を対象としたアンケート調査と、来園者の行動及び移動の軌跡を追跡調査する観察調査というものであった。

アンケート調査の結果から、真岡市ではより家に近い公園を頻繁に利用し、杉並区では遠くても子供があそぶ公園を週に2～3回利用するという利用の傾向の違い等が分かったが、差の原因まで踏み込めなかったのが残念である。

また、観察調査の結果から行動パターンに顕著な差異が生じることが分かったが、これは公園の構造や遊具の配置、さらに公園の周辺環境に規定されていた。真岡市では公園内に「広場」が設けられており、そのため遊具が一方方向に配置され、一方方向型という行動パターンになった。一方、杉並区では遊技場が設けられていたり、遊具がアスレチック的要素を持ったものが多いため、集中型という行動パターンになりやすく、球技場のない公園では遊具の配置によって集中型や全体型となった。

これには真岡市と杉並区の土地区画整理事業が深く関係している。真岡市では比較的新しいもので、現在も進行中であるため、歩行者専用道路の整備や「広場」の設置等が行われている。しかし、杉並区では昭和10年にすでに竣工しており、これから同様な整備をすることは困難である。このような背景から、公園の構造や遊具の配置が全く違ったものとなっているため、行動パターンも違っているのである。

以上のことから分かるように、公園における行動状況は周辺環境の影響を受け、地域間に差異が生じているのである。

## 来るべき国際化の波へ

### ー日本競馬の門戸開放ー

大西ゆみ

近年、競馬がレジャーとして大きく取り上げられるようになってきた。週末には、競馬場で若いカップルや、小さな子供連れの親子をしばしば目にする。競馬場がアミューズメント施設として、広く受け入れられているのである。

しかし、競馬場で繰り上げられる華やかなレースの一方で、それを支える軽種馬生産界が、現在最大の危機に直面しているのであった。というのも、日本で生まれ育った競走馬(内国産馬)の売上げが、近年急激に減少しているのだ。その理由は、外国産馬が日本へ大量に輸入されているからなのだ。なぜ、このように外国産馬の輸入量が増加したのか。それは、日本中央競馬界(JRA)による「外国産馬出走制限緩和8ヶ年計画」の実施、および、外国産馬の価格の安さ、日本の競走馬流通の停滞などのさまざまな要因があげられる。

まず、「外国産馬出走制限緩和8ヶ年計画」の実施にあたっては、JRA、日本軽種馬協会および、日高軽種馬農協との激しい論争が繰り上げられた。外国産馬の出走枠を広げれば、今より一層多くの外国産馬が日本へ輸入されることになる。そうすれば内国産馬は売れなくなり、しかも競走馬が優勝した時の「生産者賞」などの賞金が海外の牧場に支払われることになり、日本の中小の生産牧場は経営が成り立たなくなる。こういった牧場側の立場を考慮してJRAでは、保護策をとっているがあまり効果はみられない。

次に競走馬の価格については、日本の種牡馬の種付け料の高さがその要因である。競走馬流通の停滞は、昔から続いている庭先取引

が最大の原因をつくっている。古い調教師と馬主、生産者の関係が、若い(新しい)馬主の購買意欲を減少させてしまっていると言ってもよい。つまり、日本国内では、良い馬を安く手に入れることが非常に困難になっているのだ。

外国産馬と内国産馬の能力については、収益性においてはそれほど差はない。しかし、3歳、4歳における外国産馬の優位性だけは目をみはるものがある。なぜ、3歳、4歳においてこれほどの格差が生まれるかというところ、それまでの飼養調教技術の差に因るところが大きい。日本人生産者には技術の向上が必要である。

日本の競馬がこれほど見直されるようになったのは、世界最高レベルの賞金体系をもって競馬が開催されているので、海外の競馬関係者から注目されるようになったからである。日本は、海外から押し寄せてくる波に立ち向かうためにも、国内における軽種馬生産を、もっと合理的に、ただ生産頭数を増やすのではなく「少数精鋭制」で、行っていかなければならないだろう。

## 商店街の現状と将来

### ー板橋区大山ハッピーロードを例としてー

大堀仁美

本論文は、近年の商店街事業の低迷、存続の危機がいわれている中で、わたし自身が日常生活において利用しているハッピーロード大山商店街について、商店主がイメージするハッピーロードと、消費者がハッピーロードについて感じていることとの差を考え、商店街の実態を知り、商店主の意識確認をもとに、対策を考えることを目的とした。

方法としては、事業調査報告書、参考文献等資料参考後、板橋区役所商工課とハッピーロード大山商店街振興組合を訪問し、商店街の現状を知り、傾向と対策について考えた上で、ハッピーロード利用者と同年代の若い女性に聞き取り調査を行い、商店主に行ったア